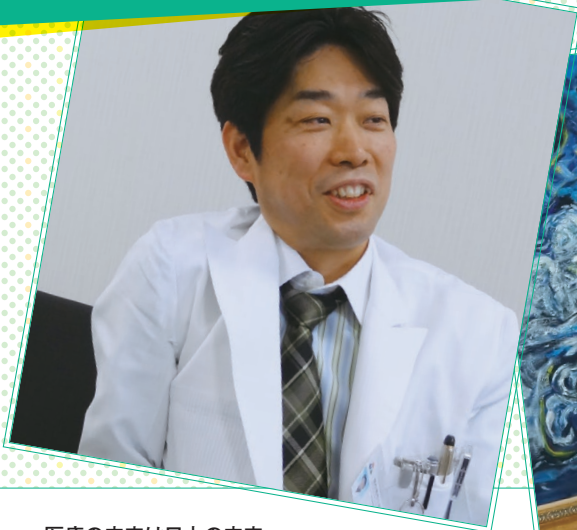




既存の「医療」や「福祉」の価値観から抜け出て、新しい社会システムを構築する  
もり きよし  
**森 清 医師** 社会医療法人財団大和会 在宅サポートセンター



# 日本の未来を変えたい!



医療の未来は日本の未来。  
未来を変えられるのは政治家や官僚だけだろうか？

某缶コーヒーのCMの、  
「ねえババ! この世界は誰が作ってるの?」「俺だ!」「いや、俺だ」「俺ですね」に  
ドキッとした方も少なくないのではないだろうか。

世の中には、ほんの小さな取り組みが周囲を巻き込み、大きなムーブメントになることがたくさんある。  
それが同時多発的に起こっているのなら、まさに時代がそれを求めているということになるのだろう。  
医療の未来、ひいては日本の未来を変えていくであろう、医師と市中病院の取り組みを紹介する。

「まちづくり」を目指す医師がいる。  
高齢化が進み、消滅集落など国の存続にも関わる課題について、行政単位で模索するなか東京のベッドタウン（東大和市と武蔵村山市）を連携させて1つのモデルケースを作ろうとする医師がいる。

人々が住み慣れた地域で暮らし続けることができる「まちづくり」は、地域包括ケアシステムの基本であり、在宅医療はその「まちづくり」を構成する要素として医療以外の分野や取り組みとも連携していかなければならない（図1）。医療単独で「まちづくり」はできないのだ。実際に制度や仕組みとして動かしていくとなれば、絶対に行政の力が必要になってくる。さらには、行政の縦割りの概念を捨て、その地域を構成する複数の市町村で連携した動きをしなければ、本当の意味でそこに住む人たちのための「まちづくり」はできないと森医師は言う。今回の2つの行政を巻き込んだ将来展望の対談は、その第一歩とも言えるだろうか。医師と2人の市長が行政の枠組みを超えた、新しい社会システムの構想について熱く語り合った。対談の様子は『大和会だよりvol.112』に掲載されている。

大和会は2つの急性期病院を擁し、介護老人保健施設や在宅サポートセンターを運営する社会医療法人法人。森医師は在宅サポートセンターの要である村山大和診療所を運営。地域の医療、生活を支えている。2019年には「日本在宅医学会」と「日本在宅医療学会」を統合した『第1回日本在宅医療連合学会大会』が開催され、森医師はその大会長を務める。「在宅医療のほとんどの問題は、マニュアルや理屈では解決できません。多くの仲間と土土とともに創造的に悩み、「ひとつになること」で力になりたい」と森医師は語る。学会の開催で全国の注目が集まる東大和市・武蔵村山市エリアで、日本の未来を変える「新しいシステム」の構築に医師人生を捧げる森医師とその活動に注目したい。

広報誌  
『大和会だより』では  
森医師と東大和市長、  
武蔵村山市市長が対談。  
今後の地域医療について  
熱く語り合っています。



大和会だよりvol.112  
(5/25発行)



図1. 高齢になっても、住み慣れた自宅を中心とした生活ができ、必要な時には入院もできる街づくりです

2019年7月14日・15日 第1回 日本在宅医療連合学会大会 開催  
「ひとつになること(仮)」～医療・福祉・介護関係者・市役所との協働・連携から統合へ「まちづくり」に向けて～

## 地域に溶け込み住民のニーズに沿って柔軟に、自分も楽しむ

おだか まさあき  
**小鷹 昌明 医師** 南相馬市立総合病院神経内科

東日本大震災で地震、津波、原発事故という世界初のトリプル災害に見舞われた福島県南相馬市に、震災後の2012年4月から移り住み、働いている小鷹医師。

活動のスタートは「いま住民にとって何が必要か、何が求められているか」という問い掛けだ。仮設住宅に向き、ボランティアでインフルエンザ予防接種を行い、通院困難な患者のために往診を行う往診車がなければ自動車メーカーの社長宛にメールを送り（結果、日産からリーフが無償提供された）、患者会・相談会を再構築して崩壊しかけていた福祉・介護システムを立て直す。そして活動は、医療の範疇を軽々と越えていく。

避難生活によってそれまでの地域コミュニティがバラバラになり、中でも家族や仕事を失って男性の孤立が増えていた。孤立によるADLの低下や自殺を防ぐために継続的なコミュニティの創出が必要だと感じた小鷹医師は、2013年に病院の有志とTeam HOHP（ホープ）立ち上げる。HOHPとは「引きこもり／お父さん／引き寄せ／プロジェクト」の頭文字を取ったものだ。HOHPで行ったのは一見医療とは全く関係のない「男の木工教室」という市民活動。地域の工務店組合に協力を依頼し、公園のベンチや学校の仮設校舎に設置する本棚などを製作した。男性の孤立防止と復興支援を同時に行ったこの取り組みは広く国内外に報じられた。

いま木工教室は、参加者が減ってきているという。これは参加者が新しい目標ややるべきことを見つけた結果であり、いいことだと小鷹医師は言う。継続して来ている参加者も、教室に新しい価値を見出し、自宅や知り合いの家の改修するなど、趣味として日曜大工が楽しめるようになっていく。このように、年月が経つにつれて変わる地域のニーズに合わせて、2015年からは夜間の防犯を兼ねたパトロールランを行っている。これも、帰還者や原発の作業員などで人口が増えて、少し治安が悪くなったという住民の不安を拾い上げたものだ。

他にも小鷹医師がかかわってきた市民活動は「男の料理教室」「エッセイ講座」「学習塾での小論文、面接指導」などと多岐にわたる。

これらの活動に共通する小鷹医師の思いは、自己犠牲や使命感などではなく、基本はまず自分が楽しいと思えること。その結果、少しでも喜んでくれる人がいればいいという。これからも、地域に溶け込んだ小鷹医師の活動は続く。

地域 の ニ ーズ	2011年	2012年	2013年	2015年	2017年
避難による通院困難、福祉・介護システム崩壊	3月11日 東日本大震災発生	8月 相馬市視察			
地域コミュニティ崩壊、男性の孤立		4月 南相馬市に赴任	● 学習塾での小論文・面接指導 10月 エッセイ講座開始 11月 コミュニティMでパソコンリテ		
夜間の治安悪化			1月 男の木工教室開始	6月 パトロールラン開始	
中高生の自殺			9月 男の料理教室開始		7月 いじめを考えるシンポジウム
小高医師の活動					



男の木工教室



パトロールランチーム



2016年の相馬野馬追にて

## 遊び心をもった“攻めのリハビリ&最強の老健”で医療連携の核となる

さこう まさはる  
**酒向 正春 医師** 大泉学園複合施設 施設長

4月、練馬区にいままでにない施設がオープンした。同じ建物の中に回復期リハビリテーション病院と介護老人健康保健施設があり、訪問看護、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション、居宅介護支援事業所の機能ももつ。

2,000坪の敷地の中に建つ施設の周囲は1周300メートルの散歩道になっており、一年中花が絶えないように計画されたガーデンを楽しみながらリハビリができる。施設でイベントを行う際には地域住民にもガーデンが開放される。3階建ての施設の階段には段数の数字が表示されていたり、直線100メートルの廊下には2.5メートルごとに線が引かれていたり、施設を丸ごと使ってしっかり楽しくリハができる工夫が凝らされている。内装や備品にもこだわった施設をつくった経緯について、“攻めのリハビリ”で知られる施設長の酒向医師は次のように話す。

「東京23区内は駅から自宅まで1キロ以上離れているところがほとんどないです。唯一の例外が駅から2.2km離れているこの場所。陸の孤島と言われていました。加えて、練馬区では人口の4割しか区内で急性期の治療ができない状況であり、回復期のリハ病院もありませんでした。この病院をつくったことで、患者さんが練馬区に帰ってこれるようになり、自宅にも帰れるようになったんです」

医療過疎で医療連携がなく、陸の孤島といわれる場所ならば、東京都以外の地域でも真似ができるモデルケースになると思ったという。もともと開業医は多かったため、在宅になった患者は開業医に紹介できる。リハ病院が核となった、急性期→回復期→慢性期の医療連携が確立した。

老健でも、患者の残存能力を発揮させて、その人ができることを無理なくやらせようという“ゆるい”リハを行い、在宅に戻すプロジェクトを進めている。回復期のリハを知っている酒向医師たちだからこそ、どこまでが無理なく行えるリハなのかの判断が可能なのだ。コストをかけずに老健の制度を最大限生かすために何ができるかという、いままでにないチャレンジを、遊び心をもって実践している。

在宅になった方に、医療に頼らずにまちの中で社会参加、社会貢献してもらい、それを住民・NPO・自治体が支援するのが地域包括ケアで、医療連携はあくまでその土台。ただ、土台はしっかりしていることが重要であると酒向医師は強調する。

「現場での最先端リハビリを見てみたい医学生は見学を受け付けます。カッコいいリハビリ医像をお見せしますよ」



外観



リハ室からも出ることができるガーデン



階段の段数表示



廊下に引かれた目印のライン



施設内の植物MAPを説明する酒向医師。花を探しながら歩くこともリハの一環



現在は画家として活躍する元患者が描いた人間回復の絵画

大泉学園複合施設（ねりま健育会病院／ライフサポートねりま）  
 〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町7丁目3番28号  
 TEL : 03-5935-6102 URL : <http://nerima-k.or.jp/>